

翻訳におけるコミュニケーション方略使用：

村上春樹作品英訳の分析¹

Use of Communication Strategies in Translating:
An analysis of English-language translations of
works by Haruki Murakami¹

浅利 庸子
東京理科大学

Abstract

The present study is intended to (a) analyze English-language translations of works of Japanese literature, (b) examine the degree to which expressions in Japanese in the original works and those in English, given as their translations, correspond to each other or fail to do so, and (c) discuss the relations between the expressions in the two languages by placing those relations in the framework of the use of communication strategies. The works taken up for our analysis are *On Seeing the 100% Perfect Girl*, *One Beautiful April Morning*, *A Perfect Day for Kangaroo*, *The Second Bakery Attack*, *The Little Green Monster*, and *Birthday Girl*, all by Haruki Murakami. Our focus is on the problems that must have arisen in the process of translation and on the way in which the translator seems to have attempted to solve them. Through the discussion of those issues a hypothesis is presented that the techniques used by the translator are akin to the communication strategies used by learners of foreign languages.

キーワード： コミュニケーション方略、翻訳

¹本論文は、2016年度にNHKラジオ第2放送で放送された番組「英語で読む村上春樹」のテキストの内容のうち、筆者が担当した部分を下敷きにし、それにさらなる考察を加えたものである。また、筆者は、本論文の内容の一部を「翻訳の楽しさ」(TALK研究会, 2016年10月29日)において口頭発表した。

1. はじめに

翻訳者の役割は英語読者にも原文を読む読者と同じように作品を鑑賞してもらうことである。日本語の原文を英語に翻訳する際、翻訳者は二つの言葉の違い、二つの国の文化の違いを十分に理解しなくてはいけない。本論文は、翻訳を切り口として日本語と英語の対応関係を論ずる。言語材料としては、村上春樹の5編の短編小説、「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」、「パン屋再襲撃」、「緑の獣」、「バースデーガール」、「カンガルー日和」を取り上げ、その翻訳の分析に当たっては、Jay Rubin (1994) と Philip Gabriel (2006) を対象とする。日本語と英語との間の翻訳についての翻訳論は多いが(たとえば柴田, 2013)、本論文は上述の村上の5点の短編に対象を絞り、村上作品の世界に登場する現代日本社会の言語、事象が英語で表現される場合の種々の問題点を論ずる。その際、次の2点の観点から考察を行う。まず、日英の対応関係を大きく二つの点に分けて議論する：(1) 言語レベルの問題点、(2) 文化レベルの問題点、である。両者は峻別できるものではないが、議論の都合上、便宜的にふたつのレベルを設定する。次に、今回考察対象とする日本語から英語への翻訳を、コミュニケーション方略の枠組みのなかにおける位置づけという観点から論ずる。引用する英文のなかで、筆者が特に焦点を当てたい箇所を、筆者の判断でイタリック体にした。

2. 人物・事象描写の手段としての言語

言語は知的意味(cognitive meaning)のみを伝えるものではなく、それ以外の情報を豊かに含むものである。こうした情報は、余剰情報(redundancy)として説明されることも多いが、文学においては、この後者のタイプの情報は決して不要、無駄なものではなく、むしろ、非常に重要であり、時として、人物・事象描写のために中心的役割を担うことすらある。以下に、このことの実証となる翻訳の実例を挙げて分析を行う。

2.1 ポライトネスの問題

ポライトネス表現は、翻訳につきまとう大きな問題の一つである。Brown と Levinson によると英語ではポライトネスは、「相手に不快な思いをさせないように配慮する態度」(Brown and Levinson, 1987) である。日本語にも英語にもポライトネスのレベルを表現する手段が備わっているが、日本語においてはあらゆるセンテンスに現れる、体系としての敬語が存在するのに対し、英語においては多くのセンテンスが common core (Leech and Svartvik, 2002, pp. 9-10) と呼ばれる部分を形成するものである。英語において、特に上

のレベルのポライトネスを表現したい場合には、話者は *would* などの助動詞の使用、*I wonder* のような間接的な表現、*sir* などの特定の呼格 (*vocative*) を使う。小説の中では様々な口調が使われ、そこには、当然、さまざまなレベルのポライトネスが表現されるが、敬語をもって表現される意味を英語に対応させなくてはならない場合、英語独特の手段を使う必要が出てくる。この場合、日本語に対応する英語表現の選択肢として複数のものが考えられ、どれが最も適切かについては、具体的表現のニュアンスを子細に検討する必要がある。以下は「バースデーガール」からのセリフである。物語ではアルバイトの少女とオーナーの老人が会話するシーンが多々あるが、以下の例（例1）は少女のセリフである。

（例1）「一時間ほどあとで伺いますので、食器はいつものように廊下に出しておいていただけますか？」と彼女は言った。

“If you would be kind enough to set the dishes in the hall as usual, sir, I’ll come to get them in an hour.”

「～しておいていただけますか？」という非常に丁寧な表現を訳す方法はいくつかある。ここでは

- (1) *Could you set the dishes, sir?*
- (2) *Do you mind setting the dishes in the hall as usual, sir?*
- (3) *Could you please set the dishes, sir?*
- (4) *Would it be possible for you to set the dishes, sir?*
- (5) *Sir, if you would be so kind as to set the dishes, I would really appreciate it.*

などの選択肢がある。ポライトネス表現としては、後に挙げたものほど丁寧さの度合いが高いと言える。しかし、この小説の場面では、アルバイトの従業員がアルバイト先のオーナーと初めて会話をするシーンである。初対面であることと、上司であるという二つの要因を踏まえると丁寧度の高い表現を使うことが自然だと翻訳者は判断し、最高レベルの丁寧さを表す表現を使って「・・・(して)いただけますか？」を *If you would be kind enough to set... sir* と訳すことにしたのである。ここで注目すべきは、この表現が、(a)そもそも日常会話の英語表現としてさほど頻度が高くないこと、(b)少女が日常に言う言葉として特にまれである、という2点であると考えられる。この英語表現は、さほどまれではない日本語の「いただけますか」のポライトネスのレベルを超えるものと言え、翻訳に込められた意図として、少女と老人との間の上述の関係を確実に読者に伝えるという意図があると考えられる。

また、英語では *sir*、*ma'am*、*madam* などの呼称があり、それによって敬意を表すこともできるが、敬意のみならず、話し手が相手との距離をどのように認識しているかをも表すことができる。以下（例2）は「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」からである。主人公の「僕」が道端で一人の女性に一目ぼれし、話しかけようとするが、どのように話しかけるか悩み頭の中でシミュレーションしている場面である。

（例2）「こんにちは。ほんの三十分でいいんですけど僕と話をしてくれませんか？」
 “Good morning, *miss*. Do you think you could spare half an hour for a little conversation?”

Miss は20代・30代の女性に使う呼格であるが、一般的には接客など使われることが多い。直接的な *can you* に比べて間接的である *Do you think you could spare* という間接的な表現を使い、それに上述の *Miss* を組み合わせることで、このセリフは極端に硬苦しい印象を与える。その不自然さが「僕」の緊張していることをより想像しやすくし、この場面をコミカルなものにしている。堅苦しきの度合いについて考察すれば、原文の堅苦しきはさほどでもないと言える。それは、「いいんですけど」という、やや砕けた表現や、「くれませんか」というさほど堅苦しくない表現から分かる。これに対し、英訳には砕けた表現が含まれておらず、*miss* の使用と *Do you think you could . . . ?* の使用とが堅苦しきのレベルを上げている。そこで、英訳のほうが日本語より硬い印象を与えていると言える。コミカルな印象は、この、非常に高いレベルの堅苦しきから来ると考えられる。

2.2 同調表現

同調、否定の返事は、同調・否定以外にかなりの付加的情報を伝える。ここでは、*yes* 以外の同調表現を分析する。下の例（例3）は主人公の「僕」と妻（もしくは彼女）との間の会話である。二人が動物園に行き、母親カンガルーが赤ちゃんカンガルーを袋に入れている姿を見て彼女が「僕」に質問するシーンである。

（例3）「保護されているのね？」／「うん」
 “She’s protecting her baby, right?”／“*Yep*.”

日本語の「うん」に対応する *yep* は *yes* と同じ意味だが、話し言葉でしか使わない。「うん」にはそのほか *yeah*、*yup*、*uh-huh*、*yah* などがある。これらは目上の人に対しての使

用は避けられている。ここで「僕」が *yep* を使っているということは、二人の関係が近い証となっている。今回の分析には含めていないが、否定の表現である *nope* は *yep* と同レベルのポライトネスを持つ表現であり、同じ否定の *nah* はさらにその下のレベルの表現であると言えるので、これらは日本語の「うん」にほぼ対応している。

以下の会話（例4）も同作品からだが、夫婦・カップルらしいやり取りである。

（例4）「ねえ、どこかでビールでも飲まない？」と彼女は言った。／「いいね」と僕は言った。

“Hey, you want to grab a beer somewhere?” she asked. / “Sounds great,” I said.

彼女の (Do you) want to grab a beer somewhere? という誘いに対し「僕」は *Sounds great*（「それいいじゃん」）と答えている。誘いや提案に対してフォーマルにもカジュアルにも返事をするができるが、*sounds great* はカジュアルである。このカジュアルさは、ひとつには、文頭の *that* が脱落していることに由来する。もしも、「僕」が *I would love to* や *That sounds very nice* などと答えていたとしたら少し堅苦しすぎ、この会話は不自然に聞こえていただろう。カジュアルな表現にはそのほか *sure*、*cool*、*awesome* などもある。*Cool* や *awesome* はどちらかという若者が使う傾向があるので、返事からだけでも少し発話者の年齢を予想することができる場合がある。

2.3 文法的不完全さ

以下のセリフ（例5）は「パン屋再襲撃」からである。主人公の「僕」が昔パン屋を友達と二人で襲撃することを試みたときのことを妻に説明している場面からである。パン屋の店主が二人に対しパンをいくらでも持っていくことを許すが、その代わりワグナーの序曲集を最初から最後まで一緒に聞かなくてはいけないといわれたときについての反応である。

（例5）[. . .] それで僕と相棒はひどく混乱してしまった。ワグナーが出てくるなんて、当然のことながら我々は全く予想しちやいなかったからね [. . .]

Nobody could have anticipated that. *I mean—Wagner?*

I mean は「ていうか」や「いやその」というような意味で、より適切な言葉で言いなすときの前置きとして使われる口語表現である。また、話し相手があまりにも予想外の発言

をした場合に *I mean, seriously?* や *I mean, really?* と反応することがあるが、「僕」もここでは驚きが隠せなく、困惑がうまく表現されているといえる。

驚きを自然に表現するには次の工夫がされている。「ワグナーが出てくるなんて、当然のことながら我々は全く予想しちやいなかったからね。」という日本語には、特段、文法的不完全さはない。しかし、「しては」ではなく、1モーラ少ない「しちや」が使われており、口調がくれたものとなっている。この口調を英語で表現する方法として、同じように音変化のある英語（たとえば、*could've*）を使う方法もあるだろうが、ここでは、音声レベルではなく文法レベルでの工夫が行われている。すなわち、たとえば、*I mean, could anybody have anticipated Wager?* といった、より完全な表現を使わず、*I mean—Wagner?* という切り詰めた言い方により、日本語の口調を伝えようとしたものである。

2.4 熟語的表現

日本語では特段熟語的とは言えない表現を、英語の簡潔な熟語的表現を用いて処理することができる場合がある。こうすることにより、原文のニュアンスをより正確に英語読者に伝えるだけでなく、セリフを自然なものにすることができる。「パン屋再襲撃」と「カンガルー日和」からの二つの例（例6と例7）を見てみよう。

(例6) でもそれははっきりと目に見える具体的な問題というわけじゃないんだ。

Nothing you can put your finger on.

(例7) 僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるのだろう。

I've never seen a giraffe give birth, or even whales swimming, so why make such a big deal about a baby kangaroo?

最初の例は「パン屋再襲撃」からである。主人公の「僕」が妻に問題が起きたということ述べ、しかしその問題が簡単に説明できるものでないということを伝えようとしているところからのセリフである。原文を一語一句訳することもできたが、*Nothing you can put your finger on* というフレーズを使用している。このフレーズは、「なんとなくわかるけれども、はっきりとは『これだ』と言いきれない」という状況の時に使う表現である。直訳するよりもすんなりと英語読者には「僕」のもやもやした気持ちがストレートに伝わってくる。二つ目の例は「カンガルー日和」からである。主人公の「僕」の妻（もしくは

彼女) がカンガルーの赤ちゃんをどうしても見なくてははいけないので、何があろうと動物園に行かなくてははいけないという主張に対しての「僕」の質問である。「なぜ〜が問題になるのだろう」を直訳してしまうと「問題」は **problem** となり次のような訳になる：

Why is the baby kangaroo a problem right now?

これでは、赤ちゃんカンガルーに問題があるように聞こえてしまう恐れがある。しかし、ここでの日本語の「問題になる」は「話題として取り上げるべき事柄である」という意味である。すなわち、「僕」が言いたいことは「何をそんな大げさに考えているんだ」ということである。「〜のことで大騒ぎする」と言いたいときは **make a big deal about** というフレーズを英語話者は口語で使うことが多い。「僕」にこの表現を使って言葉を返させることで、その返答がガタガタいう彼女に対して「僕」の口から自然に出たセリフのように聞こえさせている。このように、翻訳者は、場面に応じて原文のセリフのニュアンスを理解して直訳よりも的を得た表現がある場合は、その表現を優先すべきだと判断することが少なくない。

2.5 日本語の擬音語・擬態語

日本語は英語に比べ擬音語 (onomatopoeia) ・擬態語 (mimesis) を頻繁に使用する。これらは生物の声や無生物が出す音、動作や状態などを音で象徴的に表現するため用いられる。よく知られている動物の鳴き声 (例えば、「わんわん」が **bow wow** になる) などを訳すのは特に問題がないが、行動を表すために用いられる擬態語は英語にないことが多いのでその擬態語を表す品詞で補うことがしばしばある。例えば、「そーっと」、「バタバタ」、「どんどん」などは副詞的に動詞「歩く」を修飾するものであるが、これらを英語で表すには各々の状況にあう動詞を使用するしかない。「そーっと歩く」は **tiptoed**、「ばたばた歩く」は **bustle**、「どんどん歩く」は **stomp** などのように訳すことができる。以下 (例 8-11) は「緑色の獣」から擬音語・擬態語を含む文である。

(例 8) そして穴の中からもそもそ緑色の獣が這い出てきた。

[. . .] there crawled a little green monster.

(例 9) そして獣はその不気味な目を独楽のように長いあいだくるくるくと回していた。

Then it spun its eyes for a long time, like two weird tops.

(例 10) [. . .] 赤い汁のような涙がぼろぼろと音を立ててこぼれた。

[. . .] tears like red juice ran down from them, splattering on the floor.

(例 11) [. . .] その立派な緑色の鼻までがみみずのようにするすると縮んでいってしまった。

[. . .] even is strong green nose shriveled up until it was no bigger than a worm.

例からも英訳では日本語の擬音語・擬態語に似たようなニュアンスを持つ動詞で置き換えることで対応していることがわかる。ここに挙げる例は少ないが、日本語の擬声語・擬態語と英語の特定の動詞との対応関係を示唆するものと言える。

3. 文化面の対応について—日本と英語圏における一般常識の違い

ここからは、日本語話者と英語話者とが持つ一般常識の違いの問題を扱う。このレベルの認識のズレが、翻訳を困難にする可能性は高く、翻訳者は、日本についての知識を備えていない英語読者にでも小説を理解してもらうために様々な配慮をしなければならない。ここでは3つの対応法を紹介する

3.1 内容を多少変える

日本人にとっては親しみのあるものも英語圏の読者にとっては想像しにくいものがある。以下の例（例 12）は「緑の獣」からである。

(例 12)「庭の中にあるいろんなものの中でも私はとくに一本の椎の木を眺めていた」。

Of all the many things in the garden, the one I looked at the most was the *oak tree*.

「椎の木」は英語では *chinquapin tree* だが、その名の木は西洋では珍しいものである。よって訳では、見た目も似ていてさらに西洋人にも親しみのある *oak tree*（「櫟の木」）として翻訳された。櫟の木はアメリカでも多く生息するうえ童話や詩に登場することがある。よって、ここでは読者に受け入れやすくイメージもしやすいように木の種類を変えて訳したのである。

3.2 説明を加える

次に英語読者に理解してもらえるように、説明を加えることがある。例えば、「パン屋襲撃」には次の文（例 13）がある。

（例 13）「彼女が体の角度を変えるたびに、ポケットの散弾が枕のそば殻のような音を立てた」。

Every time she shifted the angle of her body, the shotgun shells in her pocket rustled like buckwheat husks in an *old-fashioned* pillow.

訳には *old-fashioned* という単語が補足されていることがわかる。西洋ではそば殻を含む枕は珍しく、英語読者に当たり前のように *buckwheat husks in a pillow* とだけ伝えたと、読者がどのようなものなのか分からず混乱してしまう可能性がある。よって *old-fashioned*（「古風な」「昔ながらの」）という短い説明を加えることで、翻訳者は日本には伝統的にそば殻の入った枕があるということを読者に伝えているのである。

地名は特に説明を必要とする。小説の中では様々な都道府県が出てくるが、日本を訪れたことのない読者、または日本の街について知識がない読者にとっては、主人公が住む町がどのような雰囲気なのかわかりづらい。この場合、町のイメージを表す形容詞が補足されることが多い。いくつかの例を紹介する。

まず、「バースデーガール」は六本木に立地するレストランとその建物の中でのシーンが展開する。原文は「彼女が働いていたのはそこそこ名のしれた六本木のイタリア料理店だった」とあるが、訳はただ単に *Roppongi* とはせず *Her workplace was one of the better-known Italian restaurants in the tony Roppongi district of Tokyo* と日本の地名を知らない英語圏の読者にも想像しやすいように *tony*（「しゃれた」「ハイカラな」）という情報が足されている。地方のレストランか、おしゃれな都会のレストランなのかではイメージが変わってくるのでこの情報は大切だといえる。

また「カンガルー日和」には次の文（例 14）がある：

（例 14）「青山通りのスーパー・マーケットで昼下がりの買い物を済ませ、コーヒー・ショップでちょっと一服しているといった感じだ」

She looked like someone who'd just finished her afternoon shopping at a supermarket on the *main drag in upscale Aoyama* and was taking a break in a nearby coffee shop.

青山通りは単に *Aoyama street* と訳すのではなく *main drag in upscale Aoyama*（「高級

エリアにある青山の大通り」) としている。この she は実はお母さんカンガルーのことである。カンガルーが真夏の日差しの下、格好良くコーヒーショップに座っている姿を想像するだけでも面白いが、このコーヒーショップがどこにでもあるコーヒーショップではなく高級エリアにあるコーヒーショップであるということがこの文章のおかしみを醸し出している。よって、英語圏読者の理解のためには「青山は高級地域」という情報が必要なのである。

3.3 省略

ここまでは情報を替える方法、情報を足す方法を見てきたが、次は情報を引く方法を見ていく。英語読者を困惑させてしまう可能性が高いものは省略することがある。例えば、「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」では主人公の「僕」が一般的に男性が女性に対して持つタイプについて述べているところである(例15)。

(例15) 例えば足首の細い女の子がいいだとか、やはり目の大きい女の子だなとか[...]

[...] one with slim ankles, say, or big eyes, [...]

訳では「やはり」が省略されている。このことばは、「誰でもそう思うだろう」といったニュアンスで使われることが多いので、英訳するとすれば、of course などの言葉がそれに対応するだろうが、この英語を訳のなかに入れた場合、読者が混乱する可能性がある。なぜなら、女性に対する「美」の価値観は英語圏と日本とは異なっており、目の色のタイプなどは美しさに関係があると思われているが、目が大きいほうが良いという考えはあまり一般的でないと言えるからである。なるべく忠実に訳すことが求められる翻訳者だが、このように臨機応変に対応する技術も必要となる。

4. コミュニケーション方略の観点から

外国語使用者は、限られた目標言語能力を活かしてコミュニケーションを成り立たせるために、コミュニケーション方略を使うものであるが、こうした方略使用の観点から上記の翻訳を分析すると、異なる言語の対応関係の興味深い側面が浮き彫りになる。方略には大きく分けて、情報伝達のレベルを上げることを意図した達成方略(achievement strategies)と、情報伝達をある程度あきらめる縮小方略(reduction strategies)があり、それぞれの範疇の方略に下位範疇がある(Færch and Kasper, 1983)。上に取り上げた事例について細かく見てみると、次のような分類が可能であると思われる。言語レベルのい

くつか例をとりあげ、文化レベルの訳についてもコメントする。

4.1 ポライトネスの問題

「バースデーガール」における「・・・伺いますので・・・いただけますか？」と“*If you would be kind enough to ...sir ...*”との対応関係を見ると、前述の通り、原文の丁寧さがやや増幅して訳されているとの印象がある。敬語に込められた敬語意識を訳出したという点では達成があったと言えるが、もし、訳の過程でポライトネスのレベルを上げ過ぎたのだとすれば、最適のレベルをねらうことをあきらめている点でこれは縮小であると言える。

Sir のような呼格は、日本語にも存在する（「先生」「奥さん」など）が、原文にはそのような要素がない。訳に *sir* を使うことにより、元の日本語に呼格がないという情報を曲げてしまっているので、これは縮小の例と言えるが、*sir* を使うことにより日本語の敬語の存在を伝えているという点では達成である。

上述の *miss* についても同様のことが言える。日本語には、多用される「奥さん」という表現があるが、これ以外に女性に対して一般的に使われる呼格はほとんどない。したがって、検討した英訳は、原文にない呼格を英語に入れたということによる縮小と、堅苦しさを表現できたという達成が同居している訳であると言える。

4.2 同調表現

同調の表現として取り上げた *yep* は、ポライトネスの点で日本語の「うん」とほぼ同レベルであるが、*yep* では独特の強調の気分が出やすいのに対して「うん」はその点で言えばどちらかと言えば中立的である。こう考えると、ポライトネスのレベルを訳出できたという点では達成であるかも知れないが、「うん」にはないニュアンスを訳に入れたという点では縮小であると言える。「いいね」を *Sounds great* と訳したことについては、特に犠牲にされた意味の側面は感じられないので、達成に成功した訳と呼べるのではないかと思われる。

4.3 文法的不完全さ

「ワグナーが出てくるなんて、当然のことながら我々は全く予想しちやいなかったからね [...]」を *Nobody could have anticipated that. I mean—Wagner?* と訳したことについては、かなりの縮小が行われたと言わざるを得ない。*I mean* は、ものを言いなおしたり、センテンスを言い始めるときには念頭になかったことを言い足したりするために使われる。元の日本語にはそのようなぎこちなさは全くない。むしろ、出だしの言葉は「ワグナーが出て来るなんて」であるから、*I mean—Wagner?* における *Wagner* の提示のしかた

とは逆であるとさえ言える。

4.4 熟語的表現

熟語的表現の多くは口語的であり、ここに取り上げる、*put one's finger on* と *make a big deal about* はそのよい例である。それぞれ、独特のニュアンスを持っている。前者は、指を何かに触れさせる視覚的なイメージを帯びた表現であり、後者は“Big deal!”だけでひとつの表現として成り立つことから察せられるように、きわめて口語的な表現である。元の日本語を見ると、「具体的な問題というわけじゃないんだ」「なぜ・・・が問題になるのだろう」という、必ずしも非常に口語的とは言えない表現となっている。両方の事例において、訳の過程で、原文のニュアンスが別のニュアンスに置きかえられたことは否定できない。だとすれば、ここに、ある程度の縮小が認められる。

4.5 日本語の擬音語・擬態語

擬音語・擬態語は、翻訳者にとって最も訳しにくい項目であると言えるだろう。獣が這い出すときのようすを「もそもそ」で表現した日本語は、英語の *crawl* になったとたんにそのニュアンスを失っている。涙が「ぼろぼろ」こぼれる様子は、*splatter on the floor* では完全に表せていない。「ぼろぼろ」には、涙の粒の大きさや、涙が後から後から出て来るニュアンスが込められているが、英語はそこまで忠実でない。「するすると」は *shrivel* で完全に表しきれてはいない。一般に、擬音語・擬態語は、縮小のリスクの非常に大きな分野であると言えるのではないか。

4.6 文化面について

日本語の背景と英語の背景との間に横たわる文化的な違いに翻訳者が対応する際には、まさに、達成と縮小とのせめぎあいがある。「椎の木」を忠実に *chinquapin tree* と訳さず *oak tree* に替えるという工夫は、翻訳者自身が縮小を承知であえていくらかの達成をねらったことの表れである。「枕のそば殻」を訳す際に *old-fashioned* を補足的に使うことにより、原文にはない要素を入れる縮小が行われているが、翻訳者はそれでも英語の読者の利益になるという達成を重視したものである。「六本木」「青山」を説明的に訳すことについても同様のことが言える。一般に、文化面の翻訳は、そもそも厳密な意味では不可能なことであるので、上述のような達成と縮小とのせめぎあいは宿命的と言える。最後に取り上げた省略という技術は、縮小だけしかない方法であるが、これでも、省略された部分の前後を含むセンテンス全体、あるいはディスコース全体が読者に理解されやすくなるのであれば、翻訳という観点からは一定の価値のある方法であると言える。

5. 達成方略と縮小方略について

日本語から英語への翻訳における方略使用について考察したが、縮小方略を使わざるを得ない場合、翻訳者は次の図のような翻訳を理想とするものである。

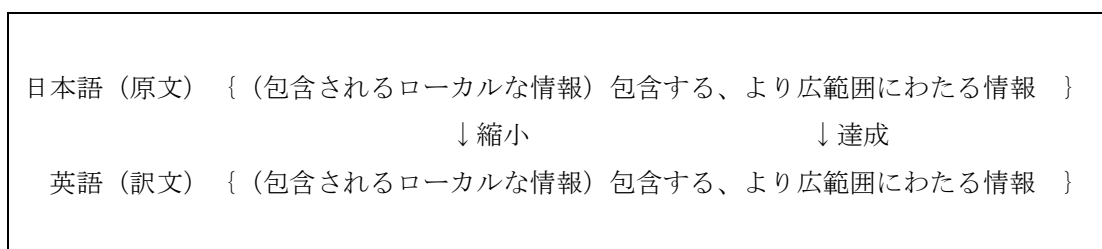


図1 翻訳者が通常目標とする訳

すなわち、文脈のなかの一部の情報について、縮小方略を使って訳出をあきらめることにより、それを包含する文脈全体の情報を、読み手が混乱しないような形に整える、ということである。これは、最終的には、縮小方略を達成方略として機能させようとすることを意味している。逆に、ローカルな情報について達成方略使用にこだわると、広範囲にわたる情報に縮小が起きる可能性がある。上述の例の「青山」、「六本木」といった地名をそのまま提示したり、「椎の木」を忠実に *chinquapin tree* と訳したりすると、ローカルな部分で達成が起ころうと広範囲にわたる情報について縮小が起きてしまう。これを図解すると、次のようになる。

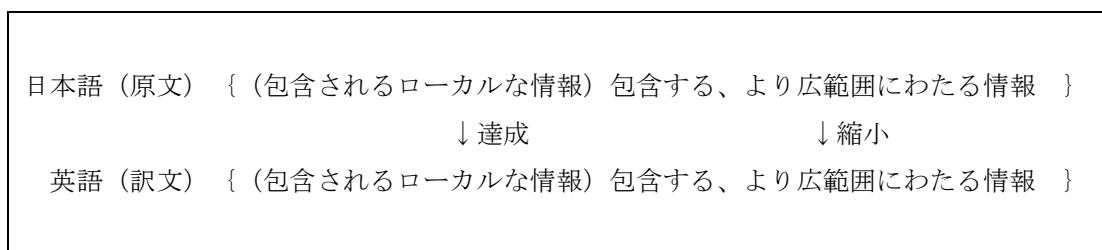


図2 翻訳者が通常避ける訳

このような結果となった場合、それは翻訳者の敗北であり、翻訳者は日本語と英語との対応関係の扱いに失敗したということになる。

6. まとめ

本論文では翻訳者がいかに英語読者にも原文を読む読者と同じように作品を楽しんでもらうように心がけているかについて実例を挙げながら、日本語と英語との対応関係を論じた。以上の例が示唆していることは、概念の対応は必ずしも言語の対応を意味しないということである。また、言語レベルの工夫によっても対応関係を明確にすることが不可能な事例が多く存在する、ということでもある。

英語教育における学習者の母語の扱いについては諸説があるが、母語を排除しない教授法を採る場合には、英語と日本語との対応関係について学習者に明示的に教えることの価値も検討に値するのではないかと思われる。

対応関係を確立するために情報を加えたり変えたり削除したりすることには、外国語使用者の方略使用に通ずるものがあり、さらに研究すれば興味深い知見が得られるものと思われる。本論文においては、この分野について、特定の文学作品を対象にした論の域を出ていないが、今後知見を蓄積し、それを体系的に提示することが出来れば、英語教育に寄与する情報が得られるものと思われる。

参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Færch, C., & Kasper, G. (1983). Plans and strategies in foreign language communication. In C. Færch & G. Kasper (Eds.), *Strategies in Interlanguage Communication* (pp. 20-60). London: Longman.
- Gabriel, P. (2006). A perfect day for kangaroo. In Knopf, *Blind Willow, Sleeping Woman* (pp. 100-104).
- Leech, G., & Svartvik, J. (2002). *A Communicative Grammar of English* (3rd Ed.). London: Longman.
- Rubin, J. (1994a). On Seeing the 100% Perfect Girl One Beautiful April Morning. In Vintage Press, *The Elephant Vanishes*.
- Rubin, J. (1994b). The little green monster. In Vintage Press, *The Elephant Vanishes*. (pp. 151-156).
- Rubin, J. (1994c). The second bakery attack. In Vintage Press, *The Elephant Vanishes*. (pp.35-49).
- Rubin, J. (2006). Birthday Girl. In Knopf, *Blind Willow, Sleeping Woman* (pp. 19-32).

- 辛島デイビッド・浅利庸子 (2016, 2017) 『NHKラジオ英語で読む村上春樹』 2016 年 4 月号～2016 年 1 月号. NHK 出版
- 柴田元幸 (2013) 『翻訳教室』. 朝日文庫
- 村上春樹 (2005a) 「4 月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」『象の消滅 短篇選集 1980-1991』. 新潮社. pp. 105-111.
- 村上春樹 (2005b) 「パン屋再襲撃」『象の消滅 短篇選集 1980-1991』. 新潮社. pp. 65-83.
- 村上春樹 (2005c) 「緑色の獣」『象の消滅 短篇選集 1980-1991』. 新潮社. pp. 205-211.
- 村上春樹 (2009a) 「カンガルー日和」『めくらやなぎと眠る女』 新潮社. pp. 149-156.
- 村上春樹 (2009b) 「バースデイ・ガール」『めくらやなぎと眠る女』. 新潮社. pp. 41-58.